

續三階教資料雜記

塚本善隆

在俗の三階教徒

(一)河東逸民正議大夫裴玄證と信行の高弟淨名の塔碑

宋の錢塘陳思撰「寶刻叢編」二十卷には、三階教關係の碑目が少なからず著録せられてゐる。就中、その卷七長安縣の條に見る、三階教祖信行並にその直弟に關係せる次の三碑の如きは、今日既に原石を佚し、その文も傳はらず、唯碑目のみなりとは云へ、創唱時代の三階教史研究の上に逸すべからざる資料である。

(1)隋信行禪師傳法碑

僧法琳撰 開皇十四年正月京兆金石錄

(2)唐化度寺淨名法師舍利塔碑

唐裴玄證撰 武德三年京兆金石錄

(3)唐逸民正議大夫裴玄證碑

正書、無書撰人姓名 貞觀八年正月金石錄

右の中の(1)法琳撰の「信行禪師傳法碑」に就いては、日本に存する古本「貞元錄」中の三階教資料を述べる時に言及する。此には、(2)、(3)の兩碑目に就いて記すこととする。

三階教祖信行は隋の文帝開皇九年(五八九)、召されて相州から帝都長安に來り、齊國公高顯はその建立せる眞寂寺(化度寺)に信行を迎へ此に別院を建て、居らしめた。この眞寂寺の別院は、隋唐三階教團の本據となるものである。信行は、開皇十四年(五九四)正月に示寂してゐるから、長安に於ける活動は僅かに約五年間にすぎぬ。されどその教化頗る盛んにして、當時既に三百餘の徒衆

How he says this is Hieichō's work!

が信行に共鳴し隨從し、眞寂寺の三階院を本部として、佛敎界に所謂別部を成すに至つてゐた。

裴玄證撰文と云はれる大信行禪師銘塔碑には、信行の死を悲しみ、

有識無識、如盲失道之哀。若見若聞、如子亡親之痛。

悲連地岳、怨動京畿。善人既歿、吾將安放。於是法師淨名、禪師僧邕、徒衆等三百餘人、夙以禪師爲善

知識、三業隨逐二十餘年。俱懷出世之基、共結菩提之友。(下略)

と記してゐる。

教祖を失つた三階別部衆は何人によつて統率せられ指導せられたか。蓋し、教祖歿後の三百餘の三階教徒衆統率の地位にあつたものは、この碑に見ゆる法師淨名、禪師僧邕及び碑文の撰者と云はれる還俗の弟子裴玄證の三者に指を屈し得よう。

禪師僧邕には、李伯樂撰文、歐陽詢書の「化度寺故僧邕禪師舍利塔銘」が存し、また「續高僧傳」卷十にも詳細な本傳が載つてゐる。然るに同じ信行碑に、門下の第一

に掲げられた法師淨名は、何故か「續高僧傳」の本傳にも附傳にも、その名を見ず、また今日その碑の存するを聞かず、碑拓の傳つてゐるものも見ない。矢吹博士の「三階教之研究」にも、信行門下のことを述べて、「就中法師淨名の傳を得ざるを憾む」と記して居られるのである。

然るに前記の「寶刻叢編」の

(2)唐化度寺淨名法師舍利塔碑 唐裴玄證撰 武德三年

化度寺は勿論長安の化度寺であり、信行・裴玄證・僧邕

等も住んでゐた三階教の本據である。この唐初の「化度寺淨名法師」を、信行禪師塔銘中に遺弟の第一に擧げられてゐる「法師淨名」にあてることには、恐らく何人も異論はあるまい。今「寶刻叢編」は、唯碑目を傳へるのみではあるが、尙此に武德三年(六二〇)とあるによつて、淨名法師の寂年が武德二、三年頃にあることが推知せられ、従つてまた彼は不幸にして相弟子の僧邕禪師よりも、十年以上も早く歿してゐるが(僧邕は貞觀五、尙教祖信行の歿後、約二十五年間に亘つて、信行遺弟中の主要人物とし

て、帝都に於ける三階教團の本據であつた化度寺に住せしことも推察し得る。

淨名碑の撰者裴玄證も信行門下の有力者である。彼はもと化度寺の僧であつたが、信行が此寺に迎へらるゝに及んで、これに師侍し、殊に師の爲により秘書役となつて、創唱期の三階教の爲に重要な役割を果した。信行撰述の三階教籍は、多く裴玄證の筆録修文を経て成れるものなりと云ふ。

初唐の道宣は、終南山至相寺に建てられた信行の塔碑の文も、居士逸民河東裴玄證の撰であり、また裴玄證は生前に自らの碑文を撰して具さに己の徳を陳べ、死後その塔所(終南山至相寺)に之を刻せしめたと述べてゐる。曰く、

居士逸民河東裴玄證撰文(信行碑)。證本出家於化度。

信行至止、固又師之。凡所著述、皆委證筆。(中略)

生自製碑、具陳己徳。死方鶴勒、樹于塔所。即至相寺北巖之前、三碑時列是也。(續高僧傳卷十六(麗本))

而して前記「寶刻叢編」に、「撰人の姓名なし」と云つて

裴玄證撰(信行傳附裴玄證傳)

る「正議大夫裴玄證碑」や、また「金石錄」卷三に、唐逸民裴高士碑正書、無撰人姓名、貞觀八年正月、裴高士裴玄證也とあるものが、この裴玄證自撰の碑であらう。

裴玄證は、三階教祖信行並びに自己の碑文を撰した外に、尙一つ初期三階教の重要人物淨名法師の碑文を撰してゐるわけである。同時代の後輩であり、同じ長安や終南山にも住んでゐた道宣が、「裴玄證傳」に前記の如く、

「至相寺北巖前に峙列する三碑」と云つてゐるのは、或はこの信行、淨名並に裴玄證自撰の三碑のことであるかも知れぬ。至相寺は信行の墓塔が立てられ、その教徒は僧俗共に此に埋葬されるを例とし、後に百塔寺と稱せられた三階教團の墳塋地である。

撰裴玄證は前述の如く信行のよき秘書役となり、その著述の助手となり、且以上の如き碑文の撰者である點から、その文筆方面の教養の高い人であつたことが容易に想像される。また「續高僧傳」には「居士逸民河東裴玄證」と記され、前記の金石書には、「逸民裴高士」と云ひ、また「逸民正議大夫」と云ふ。彼は沙門から還俗した人であ

る。而も還俗後も化度寺にあつて三階教團統率上に重きをなす地位を占めたいらしい。その傳に

末從俗服尚絶驕豪。自結徒侶更立科綱。返道之賢同繫贊。

とある。文筆の教養も高く、外社會にも内教團にも勢力をもち、また尊大自負の行爲態度のうかゞはれるのも、畢竟彼が相當な門閥の出身であつたことを推察せしめるに十分なるものである。蓋し河東の逸民正議大夫裴玄證は、隋・唐時代に幾多の名士を輩出して、社會に重きをなした河東聞喜(山西省)の名族裴氏の二門であらう。明の陸深の「燕間錄」に、

聞喜之裴。自後漢裴輯而下。葬北倉村數里間。凡五十二人。皆尚書侍郎國公將相。亦宇內之罕有也。

と歎じてゐるが、私もかつて山西省を歴遊し、聞喜縣に今も名を残してゐる裴村を訪ねて、名族裴氏の勢力の跡をしのんだことがあるので、聞喜の裴氏には特に興味を覚える。

信行以下、三階教徒が多數に葬られてゐる終南山下の

至相寺(百塔寺)の地は、「陝西通志」には、「張分碑記」を引いて「唐相裴公の施す所の地なり」と記してゐる。太宗高宗時代に長安令・吏部侍郎・禮部尚書等に歴任してゐる裴行儉の妻や、太常協律裴公の妻の墓なども百塔寺に存する。また化度寺では、高祖の武德年間(六一八—六二七)から無蓋藏が設置せられ、これが太宗の貞觀中(六二七—六四九)には、非常な盛榮を極め、莫大な財帛を貯藏し運轉するに至つた。貞觀中に裴玄智なるものがこの化度寺無蓋藏管理の任に當つてゐたが、黄金を盗んだ上に

放羊狼領下 置骨狗前頭 自非阿羅漢 安能免得偷

と云ふ皮肉な落書を遺して行方をくらましたと云ふ(平廣記四)。信行高弟の河東の裴玄證と略、同じ時代に、同じ化度寺に於いて、三階教團の重要な地位を與へられてゐた裴玄智も、恐らく裴玄證と親族關係にあるものであらう。隋から初唐にかけては、門閥勢力の頗る強かつた時代である。三階教が教祖信行の歿後間もなく勅禁を加へられ、而も佛教他派からも排撃を蒙つたにも關らず、唐初に早くも復興し、太宗・高宗の時代頗る隆盛を極め、化

Ho-tung - Pei chow, (Hsiao-tao) Pei-tsu

裴玄證撰 (信行傳附裴玄證傳)

裴玄證撰 (信行傳附裴玄證傳)

度寺の三階院と無盡藏とに集る信仰と財力とは、官權からも佛教有力者からも屢々壓迫が加へられたにも關らず、開元の勅命による無盡藏廢毀、三階院解散の斷行までは如何ともなし得なかつた。かゝることの反面に、有力な聞喜裴氏一族の外護の如きを一因として想像してもよからう。同時にまた既に教祖信行と特殊な關係にあつた裴玄證等が、門閥家系の特に重んぜられてゐた隋、唐初の三階教團に於いて、自ら相當な勢力を持ち得たことも推察されよう。

扱、此で私は教祖歿後の初期三階教團の内部に就いて少しく想像を走せて見たい。

明かに信行門下の二大高足であるのに、道宣が僧侶の爲に本傳を作り、淨名の爲には本傳も附傳も立てなかつたのは何故か。道宣は僧侶のみならず、信行門下の本濟(六一五寂)及びその弟華智(六〇七寂)の爲にも傳を作つてゐる。淨名の爲には裴玄證撰文の塔碑があつた。續高僧傳撰述に當つて、「郊郭碑碣旌其懿德、皆撮其志行、舉其器略。」(續高僧傳序)と云つてゐる道宣、現に信行・僧侶・

本濟等の碑を見て傳を作つてゐる道宣が、同じ地域にある淨名の碑だけを見てゐない筈もない。信行塔碑に僧侶と共に信行門下の二人の代表者として名を出し、またその寂年(六二〇?)も同門の本濟と僧侶との中間にあり、而も帝都化度寺で示寂してゐる淨名が、「續高僧傳」から除かれてゐるのは、單なる偶然の遺漏と云ふよりは、何等かの理由があるのではなからうか。

信行碑に門下二代表として、法師淨名、禪師僧侶と並べられてゐる所に、兩者の教養や傾向の相違も想像される。

道宣は信行傳後に裴玄證傳を附してゐるが、これは必ずしも彼を賞揚したのではなく、信行との特殊な關連に於いて記して居るのであり、その筆致には玄證の自負心の強い態度或は還俗者であり乍ら、教團統整の主動者となつたり、生前から自らの徳をたゞへた碑文を撰するが如き出すぎた行爲に對し、好意をよせてゐないことが察せられる。而して法師淨名と文筆の逸士裴玄證とは相提携してゐたやうである。信行と特殊關係にあり、且門

閥教養を自負し、而も化度寺三階教團に有力な地位を占めてゐたらしい還俗の裴玄證は、少くとも法師淨名を支持し尊敬してゐたらしい。信行・淨名兩者の碑文と、また自らの徳を賞揚する碑文とを撰した裴玄證が、自己よりも數年早く歿したと思はれる僧侶の爲には、碑文を撰してゐないのにも注意を引く。

裴玄證と親族關係にありと思はれる裴玄智が、三階教の化度寺無盡藏の財物管理に任じ、その黄金を盗んで逃亡したのも貞觀中とあるから、裴玄證の晩年からその歿(貞觀七年?)後間もない頃のことであらう。

(六三三) 禪師僧侶と法師淨名と稱號に見る對立、續高僧傳に於ける前者の立傳と後者の未載録、裴玄證の門閥と權勢と自負、裴玄智の皮肉な逃亡、これ等をめぐつて信行歿後の三階教團中に、中心勢力の暗闘抗争などが存したのではなからうか。

實踐を中心とする熱烈な新興宗教々團は、その教祖の歿後に黨派が出来易い。殊に外部からの抑壓や迫害を被つた場合に、或は更にそれが勃興の機運を得た時に、黨

派分立が生じ易い。日本の法然の專修念佛宗はそのよい例である。三階教團は支那佛教史上類例の少い熱烈な實踐的信仰團體であり、淨土門と頗る相似た教團である。

教祖信行歿して數年、開皇十九年(五九九)には、眞寂寺の建立者にして信行を此寺に迎へ、三階教本據たらしめた高顯が、朝廷から除名處分をうけて失脚し、翌開皇二十年には三階教勅禁となり、少くとも隋朝治下の長安では、三階教は公然の流傳を許されぬことになつた。やがて隋の衰亡となつたが、長安佛教も亦かゝる時に興隆するわけがない。且代つて長安に都した唐の高祖は、佛教に好意をもたず、寧ろ傅奕等の廢佛論に耳を傾け、終に武德九年(六一六)には、長安に三寺を留めて餘を廢せよと云ふが如き佛教大淘汰の命が發せられてゐる。

要するに僅かの間に長安に本據をおいて勃興成立した三階教團は教祖入寂後は間もなく受難時代に入る。而して太宗貞觀(六二七—六四九)の治世に入つて、長安佛教は鬱然として興り、三階教も亦再び興隆の機を迎へる。かゝる間に三階教團内部の黨争、門閥の還俗者裴玄證と、長老に

But how?

して三階徒衆總領の地位にあり、且行業精勤にして五百具戒を嚴持した僧侶を中心にする、黨派對立が生じてゐたのではなからうか。

此にかゝる想像をめぐらして、今後に向初期三階教團の情勢を明かにすべき資料の出現をまつことにしよう。

〔附〕相州の唐慧靜法師靈塔銘

尙ついでに、裴玄證や淨名と略、同じ時代に、三階教の成育地である相州の地方に、聞喜の裴氏出身にして、而もその行跡が三階教徒に類似せる僧の墓誌を注意しておかう。即ち安陽の寶山にある慧靜法師靈塔銘である。慧靜は「河東聞喜人也。俗姓裴氏。晋吏部郎楷之愛胄」と云ひ、十四歳出家して廣く三藏を學び特に十地に通ず。「十地偏工。伏膺有年。談塵方舉。」と云ふ。「十地」の研究は南北朝末に北支那に盛に行はれ、殊に相州の地方は、その中心をなしてゐたものである。然るに隋末に際し、佛像經卷の風雨にさらされて殘亡するをなげき、教義研究から轉じて、専ら佛像經卷の保護修理と云ふ所謂功德行に専心し、貞觀十五年(六四一)六十九歳を以て卒した。

641-645
572

ともある。

之等の點から慧靜を三階教徒に連關あるものと想像し得ざるか。假令彼が三階教徒に非ずとするも、名族聞喜裴氏出身の僧が、三階教發祥地の相州地方で、同教の現に盛に行はれつゝありし時に活動してゐたことは、注意に値することであるし、北周武帝の攻略とその廢佛とを蒙つた直後の相州地方に於ける、佛教徒の實踐的動向の一般がうかゞはれ、それが帝都長安の講學中心の佛教と傾向を異にする一例にもあげ得るから、此に附記しておく次第である。

(二)城陽の管氏——管眞墓誌と管均墓誌

左は端方所藏の墓誌(端方によれば石高七寸五分、)であつたが、氏の藏石は既に各所に流出分散してゐるから、現在の所在は知らない。

大□□□都督上柱國□郡開國公孫管眞墓誌

謹眞。城陽人也。顯慶四年八月廿日終於私第。春秋卅

有二。以調露元年十月十四日。收骨於鴉鳴埭禪師林左

起塔。(「旬齊藏石」卷十九)

碑文に、

但以屬逢隋季像(羅振玉)教陵遲。紺髮金言橫風沐雨。感斯流慟悽斷傷心。遂輟聞思盛修功德經。凡一切像集數。特造一堂莊嚴供養。(中略)。像則鑿以丹青。經則闕文續寫。(中略)。春秋六十有九。以大唐貞觀十五年四月廿三日卒於寺所。(下略)

とある。寺の名を記さないが、寶山或は少くとも相州附近の寺に住んでその後半生を經像の保護營造に捧げた人である。この人を三階教徒と斷すべき明證はない。唯

(一)三階教に關係深き名門聞喜裴氏の出であること。
(二)相州地方が三階教の發祥地であり、殊に貞觀時代まで前述の如く、慈潤寺靈琛や、光天寺僧順の如き、高齡の三階教徒が教化を垂れてゐたこと。

(三)像經の修理等の功德行は、三階教の盛にすゝめし所にして、長安の化度寺無盡藏の施財は天下伽藍修營費に供せられ、また三階教籍「大乘無盡藏法釋」には所在州縣造功德處。皆得普起隨喜助成。不必要□送化度寺。

骨を收めて鴉鳴埭禪師林に塔を起すは、唐時代長安方面の三階教徒の間に、盛に行はれた葬法である。鴉鳴埭は長安の南約六十支里の終南山榎梓谷であり、禪師林は信行禪師の塔墓のある所、即ち信行禪師塔院が營まれ、信行禪師を慕ふものが續々此に陪葬されたれば、百塔寺の稱を得た所である。顯慶四年(六五九)卅二歳で卒した管眞が、調露元年(六七九)に收骨起塔せられ、この間二十年を經過してゐるのは、思ふにその屍骸を山野におき禽獸に血肉を供養する、所謂林葬の法によつて骨のみの殘る日をまつてゐた爲であらうか。林葬は三階教徒によつて頻りに行はれたものである。然るに此に興味深きは、管眞と同年同月同日に、同じ信行禪師林へ收骨起塔せられた、同じ城陽の管氏があることである。「八瓊室金石補正」^{卷三}に「長安にあり」として載せてゐる萬安縣令管均墓誌(方一尺四寸五分、)がそれである。

大唐故綿州萬安縣令管府君之墓誌

公諱均城陽人也。乾封元年正月十二日遭疾薨於私第。

春秋六十有九。以調露元年十月十四日。息宏福寺僧

秦。收骨起塔於終南山鴉鳴壇、師林左。

長安南郊終南山下の三階教祖信禪師墓域に收骨起塔する三階教徒に共通な葬禮によつて、同日に葬られた城陽の管眞と管均とは、恐らく同族の人であらうし、また三階教信奉者であつたであらうと想像せられる。

萬安縣令管均の墓塔は、その息宏福寺僧嗣泰の建つる所である。宏福寺は長安皇城の西、修德坊に存し、貞觀八年太宗が太穆皇后追福の爲に建て、天下の名僧を召致して居らしめた寺であつて、印度から新羅朝の玄奘も此寺に住した。玄奘は印度留學以前に、三階教の播籃地であり、またその信奉者も少くなかつた相州に至つて慧休に師侍し最も知遇を得た人であり、また玄奘門下の神昉は三階教徒であつた。玄奘と相州佛教、玄奘門下と三階教と、ある連關が認められる上に、玄奘と因縁淺からざる宏福寺の住僧に、三教祖墓域の葬禮建塔の關係者を見ることは興味深い。況やこの管均の息、僧嗣泰の外にも、更に一例を挙げ得るに於てをや。

管眞・管均が收骨起塔せられた年(調露元年)に七十七

after 20 years the bones were collected?

歳にて卒し、終南山に林葬に附して血肉を禽獸に供養し、二十餘年後の長安三年(七〇三)に收骨して禪師林所に起塔せられたものに、蘆州縣令息尙直がある。塔銘は金石續編(卷六)に收められ、矢吹博士も三階教徒と推定してその全文を出して居られるものである(三階教之研究(六〇一―六一頁))。この尙直塔の建立者が、尙直の外孫弘福寺僧定持である。弘福寺と宏福寺は同じ寺である。高宗・則天の時代に長安の弘福寺に居つた嗣泰・定持の如きは、三階教僧であつたかと思はれる。

禪師林葬者	同上卒年	收骨起塔	起塔者
管眞(六二八)	顯慶四年	調露元年(六七九)	
管均(五九八)	乾封元年	調露元年(同)	宏福寺僧嗣泰
尙直(六〇三)	調露元年	長安三年(七〇三)	弘福寺僧定持

右の三金石文に出づる信行禪師墓域に收骨起塔せられた三俗人、その起塔者である弘福寺の二僧の五者全部を、確かに三階教徒なりと断定するには、尙多少資料不足の感はあるが、大體に於いて三階教徒と想像して可なるべ

く、少くとも高宗・則天武后の時代に、相當な家柄の城陽管氏の一族の間に、三階教師依者があつたことは認めてよからう。

尙新に北平から刊行せられてゐる佛教雜誌「敬妙聲」第三編に送、廣氏の「大林書評」あり、中に「矢吹慶輝三階教之研究」の一篇があり、この城陽管氏の墓誌及び前に紹介した相州慈潤寺藏深塔銘が、矢吹博士の著に漏れたることを注意してゐる。参看を希望する。

邪宗三階教説話

三階教は隋・唐の間に屢、勅禁を蒙り、教籍の禁斷、教團結社の解散などを強制せられたこともあり、また一般佛教諸派からも多く異端邪行として破斥を蒙つた。されば三階教徒が悪報をうけた話や轉宗をした説話が少からず傳へられてゐる。「釋門自鏡録」に出づる信行が大蛇になつた話や、法華經讀誦を非難した三階徒が啞になつた話等は、わが鎌倉時代にも屢、誹謗正法の悪報の例として引證せられたものである。左の二説話も亦かゝる類のものにして、矢吹博士の著書中に漏れてゐるものである。

(一)僧行の墮地獄

唐の僧祥の法華傳卷八に「絳州孤山西河道場什十三」として出す話である。筆者はこの説話を通じて法華三昧の行が正佛教にして、法華經書寫の功德を稱揚し、三階佛法が邪行なることを教へんとしてゐるのであつて、唐時代に法華信仰者對三階佛法の宗教戰の間に成りし、感應説話と解せられる。

絳州孤山西河道場——(絳州が前述した三階教に多くの關係をもつ裴氏の郷貫なる、山西省聞喜縣の北方近き所であるのも興味深い。)——に二人の僧が居た。一を僧行と名け三階佛法を行ひ、一は佛法と名け法華三昧を行じ、平素から互に先に死んだら自らの轉生した所を知らせる約束をしてゐた。三階佛法を奉じてゐた僧行が先に死んだ。僧法は亡友を思慕すること三年間、而も僧行は自らの生處を知らせない。そこで僧法は觀音像に斷食祈禱した。その五日目の夢に一沙門來つて、三階行者僧行の生所を見せんとて地獄に案内した。猛火熾燃、七重の鐵網で覆はれ、鐵扉が四面を閉ざせる中に、百千の沙門

が苦を受けてゐる。彼等は「犯淨戒不調身心者」であつた。羅刹が鋒を以て黒灰を貫き、これが僧行であると云ふ。僧法は悲んで「願くは昔の姿を見せよ」と請ふに、羅刹の唱活に身體燒爛せる僧行の姿が現はれ、この苦を救ふ爲に一日中に法華經を書寫してくれと懇願した。僧法は夢さめて書生四十人を雇うて法華經を寫し、亡き三階教徒僧行の地獄の苦を救つてやつたと云ふ。

(二)淨土教に轉じた善講

名古尾市眞福寺所藏に、建長六年(一二五四)乘忍書寫、精葉裝、「往生淨土傳 桑門戒珠集三轉あり、その卷上に三階教の信仰から觀無量壽經を通して彌陀淨土教の信仰へ轉向し、大に觀無量壽經を講じ疏一卷を著はし、元和(八〇六)末年頃に寂した、蒲州(山西省の西南、陝西省和(八二〇)に近い)の沙門善講の説話が出てゐる。本書が未刊の聞喜縣(近)の沙門善講の説話が出てゐる。本書が未刊行で世に多く知られてゐないから、左に傳文を抄出しておく。

沙門善講受持觀經往生淨土第六
尺善講者。俗姓朴、菟州人也。依投信禪門、

以三階佛法爲至極。兼律行清高、戒珠無瑕。初不信淨土教。後見觀經。深信心。悔謝前愆。廻心歸西方。專受持觀經、以爲淨業正因。對衆開講肆一百反。著疏一卷。發願以燒爲證。薪盡疏存。誦觀經三萬反。每誦口含丁子香。又衣裳皆用鮮潔。元和末年八月十五日如夢見西方聖衆來數千。即舉聲誦經。漸近室戶驚覺。告明年今日。我等迎汝。所修行業、不應退廢。講歡喜舉目。昇空不現。彌固其志、念佛誦經。至期日語門人。西方聖衆。只今來至。汝等各退後。今將去而已。門人各還房。講向西方含笑而終。年五十一矣。

善講は傳文に「依投信禪門人、以三階佛法爲至極」とある。信禪(師)が信行禪師か或は他の三階教徒信なるかは、にはかに決められぬが、兎に角信行の唱へた「三階佛法」を至極とし、淨土教を信じなかつた人である。この人が觀經によつて「悔謝前愆」、即ち三階教を邪教と

して從來の信仰を清算して彌陀淨土信仰に歸入したのである。

抑、右の書は、桑門戒珠集とあるが、今日種々の刊本となつて流行してゐる有名な宋の飛山(福建)戒珠(一〇七七寂)撰の「淨土往生傳」三卷とは、全く内容を異にせる別本である。著名な宋戒珠の「淨土往生傳三卷」に擬して晚くとも西紀第十三世紀初期までに偽作されたものである。然しこの偽作の戒珠往生淨土傳は、明かに支那の撰述から材料を取つたものであり、恐らくは今は佚書となつてゐる遼の燕京の純慧大師非濁(一〇六三寂)の「隨願往生集二十卷」から抄出せられたものであらうと想像せられる。偽作の書であるにも關らず、戒珠撰の有名な往生傳なりとして、一時京都奈良鎌倉などに行はれ、わが鎌倉時代の宗教界文學界に意外の影響を興へて居り、且つ興味深い幾多の未知の資料を包含せる一書である。このことに關しては、拙稿「日本に遺存せる遼文學とその影響」(東方學報京都第七冊)、同補遺(同上第八冊)を参照せられたい。

撰「隨願往生集」は畢竟遼初の北支那に流布してゐた佛教感應説話を集めたものである。元が既に感應説話集であり、更に抄出偽作に當つての加筆も考へられるから、此傳文其儘は、必ずしも確實な史實を傳へるとはなし難い。然し三階教對淨土教の歴史上には、唐時代に三階教から淨土教への轉向者が少くなかつたことを傳へる文獻が他にもあるから、本書の山西省蒲州の僧善講もかゝる轉宗者の一例と見てよからう。善講が憲宗の元和頃の三階教徒であつても三階教史に矛盾は來さぬ。玄宗に禁斷せられた三階教は、代宗・德宗時代には再び興つてゐるからである。代宗・德宗時代に三階教再興のことに就いては、日本に傳はる古本「貞元釋教錄」が特に重要な資料を提供してくれる。

右の二説話、僧行と云ひ善講と云ひ、共に山西省の南半、前述の三階教に深き關係ある裴氏の郷貫なる聞喜に近い所である。有力な裴氏の三階教外護に關連して、三階教の此地方への流布が想像される。然るに元來山西の地は彌陀淨土教の興起地でもある。北魏に曇鸞あり、隋

から唐初にわたる道綽あり。殊に道綽は三階教祖信行と略、同時代であり、同じく末法信仰を以てその宗旨の出発点とし、當今は末法時なるが故に、彌陀念佛教こそ現代人に適應し實踐さるべき佛教なりと力説した。その感化頗る盛にして、善導は道綽によつてその信仰を確立し、その教義を大成して盛な化導を長安に垂れ、迦才も道綽の著『安樂集』を読んで『淨土論』を著し、その中に山西地方の淨土信仰者の事蹟も多數に傳へてゐる。善導の説話をのせた眞福寺本『往生淨土傳』にも、唐代山西の淨土教徒に關係せるもの最も多く、殊に道綽の教化を直接間接うけてゐるものが多い。同じく末法信仰に立ち、一は普敬普行を説く三階教、一は彌陀專修を説く淨土教、この兩者に衝突論戰は必然である。淨土教以外の諸佛教も多く三階教に反對した。淨土教乃至諸佛教對三階佛法の宗教戰の結果は三階教の敗退となり、いつしか山西の三階教も姿を没し去つた。僧行・善講の説話は、三階教敗退、彌陀淨土教制勝時代に傳承された、山西の宗教戰物語の一例として興味深い。

〔附〕 大行禪師の年代に就いて 唐時代に三階教徒を淨土信仰に轉せしめた人として、道鏡・善導共集の『念佛鏡』續 故大行和上當在之口。亦有數箇三階。捨三階法。歸依和上念佛。 とある。大行は何時頃の人か。宋の戒珠の『淨土往生傳』には、唐僖宗代(八七四)の人としてゐるが、必ずしも信し難い。最近望月博士は貞元十年(八〇四)頃の著である澄觀の『華嚴經隨疏演義鈔』第八十五に「高齊大行和尚の宗崇念佛に云はく、四字の教詔あり、謂く信憶の二字は心を離れず、稱敬の兩字は身口を離れず(下略)」等とあるのを檢出し、大行は貞元十年以前、中唐の淨土教の高僧とせられ、その教義を論述せられた(淨土學十、唐大行和上と道鏡等の念佛鏡)。

然し此にも「高齊大行禪師」の文字に疑問が残つてゐる。普通の用例によれば、これは南北朝時代の北齊の大行と解せられるが、北齊時代に三階教徒を教化する筈がない。尤も隋から唐初まで生存して、三階徒の教化に活動を書いて居り、佛教に關係深き人である。「大行禪師義方訓」と云ひ、「元徳幢銘」と云ふ。大行はよほど教化の實績を挙げた人であつたと思はれる。而して此に義方訓とは、大行の著述訓誡を碑に刻したものなるべく、この義方訓と澄觀が云ふ「宗崇念佛にある信憶稱敬の四字の教詔」と關連せしめ得るのではなからうか。澄觀は大行が昔の高齊の帝都の地方で活動し、義方訓が碑石にまで刻まれ、これも高齊の帝都地域に存するので、誤つて「高齊大行」と記したのではなからうか。

唐閻極寺大行禪師元徳幢銘

在邯鄲縣。韓覃撰并書 訪碑錄

韓覃撰并行書 開元二十六年二月 金石錄

唐大行禪師義方訓

唐何榮光行書 開元二十六年二月 金石錄

とある。磁州と云ひ邯鄲縣と云ひ、共に彰徳の北近き所北齊の帝都の地域であり、三階教の發源地に近く、その教化の及んでゐた地域と認められる。書者の韓覃、何榮光共に未だ傳を詳かにせざれども、何榮光はこの碑の外にも(寶刻類編卷三)

日愛寺碑 開元二十六年立 磁

西明寺主惠景法師塔銘 撰并行書 天寶元年 京兆

〔三階集錄〕悉禁斷除毀。若綱維縱其行化誘人而不亂者。勸還俗。 扱玄宗の開元の時代は、三階教禁壓が勅によつて加へられた時代であり、朝権のよく行はれた時である。開元元年三階教の無盡藏院を毀ち、その財を京城諸寺に即ち三階教以外の佛寺に供して、三階教團の強固な財源を除き、同十三年には諸寺三階院の隔障を除去し、その教徒の別住結黨を禁じ、教祖の「三階集錄」を禁斷する詔を出し、